

教育目標	
「自分で考え、自分で動き、意欲をもって遊ぶ子どもの育成」 ○自己を発揮する子ども ○人とつながることを喜ぶ子ども ○主体的に遊ぶ子ども	
年度末の最終評価	
自 己 評 価	教育目標の達成状況、次年度に向けた見直し ・子どもの生きる力の源となる非認知能力を育むことを念頭に、一人一人の個性や発達を大事にしながら、子どもが主体的に夢中になって遊び込む姿を目指した保育に取り組んできた。 ・様々な体験的活動を通して、子ども個々の良さや集団の育ちを丁寧に見取り、必要な教育内容を考え、質の高い保育をめざした。 ・「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を念頭において、少人数保育という課題に向き合い、異年齢での関わりに焦点を当てた保育実践に取り組み、その成果が子ども個々の姿や態度に現れる場面が見られた。 ・子どもの豊かな学びと健やかな成長のために、子どもを中心に据えた幼保小中連携、とりわけ幼保小接続に向けた取組を充実・発展させていくことが重要である。 ・これからの激動の時代を生き抜く子どもを育むには、自ら主体的に物事にに関わり、自ら考え、工夫することを楽しむ力、そしてそれを他者と協働的に行う力を育むことが基盤である。
学 校 関 係 者 評 価	学校関係者による意見・支援策 ・子ども自ら考えて行動する姿や友達に自ら関わり繋がっている様子がよく見受けられる。 ・少人数の異年齢の子どもたちが混ざり合う保育の良さが功を奏している。 ・家庭教育では、基本的な生活習慣の確立を目指し、子どもの主体性と社会性を育むのは幼稚園教育と両輪のように噛み合わせる大切である。 ・幼保小連携接続の取組は、ようやく第一歩を踏み出し、今後子どもの具体で語り合える実質的な連携接続の推進を期待する。

学校関係者評価の評価日・評価者

	評価日	評価者
中間評価	令和6年10月21日	学校運営協議会理事
最終評価	令和7年 3月 5日	学校運営協議会理事

（１）幼稚園教育（保育の改善・充実）について

具体的な取組
・少人数保育の中で子どもの育ちを豊かにするために ～計画的に異年齢での関わりを捉える～ ・週計画案と保育実践、評価の連動（PDCA）から、日々の保育の充実を図る。

（取組結果を検証する）各種指標 ・ 幼児の遊ぶ姿の変容・週案の反省、評価の記述・事例検討 ・ アンケート項目「子どもは自分の思いを出しながら、友達と遊んだり生活したりしている」「子どもは安心して幼稚園に通っている」「子どもは、幼稚園で遊ぶことを楽しみにしている」「子どもは、幼稚園で身近な動植物に興味・関心をもって過ごしている」
--

中間評価

	各種指標結果 ・ 幼児の遊ぶ姿の変容・週案の反省、評価の記述・事例検討 ・ アンケート項目 「子どもは自分の思いを出しながら、友達と遊んだり生活したりしている」…100% 「子どもは安心して幼稚園に通っている」…100% 「子どもは、幼稚園で遊ぶことを楽しみにしている」…100% 「子どもは、幼稚園で身近な動植物に興味・関心をもって過ごしている」…100%
自己評価	分析（成果と課題） ・ 指導者が目指す子ども像を見据え、願いや意図をもって環境構成したり、子どもの遊びを援助したりすることで、主体的に遊ぶ子どもや他者と折り合いをつける子どもを育む保育につながっている。 ・ 少人数保育の中で、子どもの育ちを豊かにするために、異年齢での関わりの場面をとらえ、見取り評価することで、子どもの変容や保育の改善につながりつつある。
	分析を踏まえた取組の改善 ・ 少人数保育の中で、異年齢での関わりの場面をとらえ、見取り評価することを通して、子ども理解を深め、子どもの豊かな学びにつながる取組を進めていく。
	（最終評価に向けた）取組の改善を検証する各種指標 ・ 幼児の遊ぶ姿の変容・週案の反省、評価の記述・事例検討 ・ アンケート項目「子どもは自分の思いを出しながら、友達と遊んだり生活したりしている」「子どもは安心して幼稚園に通っている」「子どもは、幼稚園で遊ぶことを楽しみにしている」「子どもは、幼稚園で身近な動植物に興味・関心をもって過ごしている」
学校関係者評価	学校関係者による意見・支援策 ・ 少人数になると、異年齢の子どもたちが関わり合う異年齢保育をせざるを得ないというところではなく、異年齢の中で子どもたちの豊かな育ちを育むという積極的にとらえる研究実践は、重要な柱となっている。 ・ 現在、核家族化が進み、兄弟も少なくなり、地域の公園などでの異年齢の子どもたちの関わり合いも稀有になってきている状況で、少人数保育幼稚園での異年齢保育は、子どもの豊かな学びと健やかな成長のために必要な取組であると評価している。

最終評価

（中間評価時に設定した）各種指標結果 ・ 幼児の遊ぶ姿の変容・週案の反省、評価の記述・事例検討 ・ アンケート項目 「子どもは自分の思いを出しながら、友達と遊んだり生活したりしている」…100% 「子どもは安心して幼稚園に通っている」…100% 「子どもは、幼稚園で遊ぶことを楽しみにしている」100%
--

「子どもは、幼稚園で身近な動植物に興味・関心をもって過ごしている」…94.5%	
自己評価	分析（成果と課題）、重点目標の達成状況、次年度の課題 ・異年齢での関わりを意図的、計画的につくっていく中で、関わりのどこに重点を置くのか、そのための環境構成や援助をどうするのかを考えてきた。日々の保育の取組を振り返りながら、子どもの思いを受け止め、姿を丁寧に見取り、次の手立てを探りながら保育の改善を図ることで、目指す子ども像の「自己を発揮する子ども」「人とつながることを喜ぶ子ども」「主体的に遊ぶ子ども」の具現化につながっている。 ・計画的な異年齢の接点から、個人を意識した関わりが生まれ、その後の遊びや生活で自然な関わりにつながったり、好きな遊びの中での接点が継続的に続いたりした。そして、その異年齢の関わりを保障するには、自然な関わりが生まれるような保育の組み立て方（例えば、園庭で遊ぶ時間を同じにするなど）や、時間のゆとりをもった生活が必要なことも分かった。 ・異年齢のつながりや心の変化は、大きな行為や言葉に表れていなくても、子どもの姿を丁寧に記録にして追うことで、数々生まれていることが分かった。全体として見ているだけでは捉えにくいものであり、教職員同士で子どもの姿を共有することで、担任には見せない子どもの姿を知ることができたり、子どもへの願いの共有にもつながったりした。 ・異年齢で過ごすことで、遊びに活気が生まれると共に予想しない出来事が起こり、いろいろな感情体験をすることとなった。思うようにいかないことを経験しながら、相手を思いやったり自分の気持ちをコントロールしたりするなど、育ちにつながった。 ・次年度も少人数であるため、異年齢の子ども達が関わり合うことは必要不可欠である。 ・担任以外の教職員と話し合う時間を設けるのは勤務時間の兼ね合いで難しい。
	分析を踏まえた取組の改善 ・次年度も少人数であるため、異年齢の遊びを計画的に、また、日常の何気ない関わりを大事にし、子どもたちの育ちにつなげていきたい。 ・担任以外の教職員と話し合うため、職朝などを活用して子どもの姿を共有し、子どもの育ちをより広い目で見ていきたい。 ・「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を念頭において、少人数保育という課題に向き合い、異年での関わりに焦点を当てた保育実践に取り組み、自ら主体的に物事にに関わり、自ら考え、工夫することを楽しむ力、そしてそれを他者と協働的に行う力を育む保育をめざしたい。
学校関係者評価	学校関係者による意見・支援策 ・生活発表会の時に、年長児が年少児に向き合って、「困ったときは言ってね。」とやさしく声をかけ、年少児も笑顔でうなずいている姿に感動した。 ・少人数保育の課題に対峙し、異年齢の子どもたちが関わり合う保育実践を通して、幼児期の終わりまでに育ってほしい姿に現れるなど、功を奏している。

（２）架け橋期の教育の充実に向けた幼保小連携・接続に関して

具体的な取組 ・年間交流計画の作成 ・通園区域内にある幼保小中学校への保育公開及び合同研修 ・架け橋期のカリキュラムの作成と検討 ・「親子で絵本！」の取組の定着

（取組結果を検証する）各種指標 ・交流の事前・事後の検討 ・公開保育及び合同研修の実施 ・「親子で絵本！」のノート活用度 ・アンケート項目「子どもは“親子で絵本！”の取組を楽しんでいる」「幼稚園は、小中学校や地域、家庭とのつながりを大切にしている」
--

中間評価

	各種指標結果 ・二条城北小学校交流…幼小連携接続会議、小学校運動会見学会 ・二条中学校交流…チャレンジ体験 ・上京中学校交流…チャレンジ体験 ・「親子で絵本！」のノート活用度 ・アンケート項目 「子どもは“親子で絵本！”の取組を楽しんでいる」…87.5% 「幼稚園は、小中学校や地域、家庭とのつながりを大切にしている」…100%
自己評価	分析（成果と課題） ・7月末今年度の幼小連携の取組を計画し、二条城北小学校運動会リハーサルを見学し、子どもを中心に交流することができた。 ・二条中学校と上京中学校のチャレンジ体験で中学生と園児との交流する場と時間を保障することができた。 ・“親子で絵本”が、87.5%の結果から、「ほっこり子育て広場」や「保護者懇談会」などを通して、「親子読書」の取り組み方についても話し合える場を保障するようにする。
	分析を踏まえた取組の改善 ・二条城北小学校の学習発表会の見学や生活科の学習交流、入学前の給食試食会やビデオレターなど、幼小連携接続の取組を進める。 ・近隣の就学前施設と二条城北小学校に働きかけて、1月31日に本園で幼保小連携接続公開保育研修会を実施する。
	（最終評価に向けた）取組の改善を検証する各種指標 ・交流の事前・事後の検討 ・公開保育及び合同研修の実施 ・「親子で絵本！」のノート活用度 ・アンケート項目「子どもは“親子で絵本！”の取組を楽しんでいる」「幼稚園は、小中学校や地域、家庭とのつながりを大切にしている」
学校関係者評価	学校関係者による意見・支援策 ・小1の壁、不登校になっている児童の就学前施設での子どもの情報をフィードバック共有できる幼保小連携接続という子どもを中心に据えた実質的で強固な連携接続を強く望む。 ・二条城北小学校で絵本の読み聞かせボランティア派遣している状況にあって、地域の子どもたちを地域で見守り育む取組の体制を維持していきたい。

最終評価

（中間評価時に設定した）各種指標結果 ・交流の事前・事後の検討
--

	・二条城北小学校交流…生活科発表会と給食交流会、アートフェスティバル鑑賞会、学習発表会 ・公開保育及び合同研修の実施…幼保小連携接続公開保育と研修会 ・公開保育及び合同研修の実施 ・「親子で絵本！」のノート活用度 ・アンケート項目 「子どもは“親子で絵本！”の取組を楽しんでいる」…77.8% 「幼稚園は、小中学校や地域、家庭とのつながりを大切にしている」…100%
自己評価	分析（成果と課題）、重点目標の達成状況、次年度の課題 ・「親子で絵本！」については、子どもとゆったり共に過ごす時間がとりにくい方々がおられたようである。 ・1月31日（金）に幼保小連携接続公開保育と研修会を実施し、二条城北小学校教員12名、朱雀第二小学校教員1名、信愛保育園教員3名、京都府立聾学校教員1名の参加があり、幼稚園教育と保育、小学校教育の違いをそれぞれ認識し、子どもの目線に立った子どもの主体的な学びと育ちについて、話し合うことができた。 ・生活科発表会と給食交流会（2/20）やアートフェスティバル（2/28）など、5歳児と小学校1年生、5歳児と小学生との交流をもつことができ、5歳児は、個々の感想から、小学校生活への不安感は減り、期待感が強まったようである。 ・学習発表会（11/8）には、4・5歳児が参加した。 分析を踏まえた取組の改善 ・5歳児の入学する各小学校との幼保小連絡会を完全実施するようにしたい。 ・まだ実施できていない地域近隣の幼幼・幼保連携を働きかけ続けていきたい。 ・「親子で絵本！」のノート活用100%を継続して取り組みたい。
学校関係者評価	学校関係者による意見・支援策 ・幼保小連携接続の取組は、本園児に関わる複数の小学校と地域の保育園、京都府立聾学校の教職員も参加するなど、ようやく第一歩を踏み出した感がある。今後、子どもの具体で語り合える実質的な連携接続の推進を期待する。 ・中学校の不登校の増加についても、幼稚園や保育園、小学校で、子どもがどのような発達過程を経てきたのかについて情報共有して教育に携わることが必要であるのではないかと。 ・二条城北小学校の「子どもたちを語る会」など、実質的な幼保小中連携接続を強く望む。

（３）預かり保育に関して

具体的な取組 ・個々の興味に応じた遊びをゆったりと安心して楽しく過ごせる環境構成を行う。 ・教育課程内の活動と連動した遊びや季節感のある活動内容を取り入れる。 ・地域人材の活用
（取組結果を検証する）各種指標 ・預かり保育参加人数 ・預かり保育担当者と担任による教育課程内の活動や家庭との連携の振り返り。 ・アンケート項目「子どもの興味に応じた遊びを、ゆったりと安心して楽しく過ごしている」

	各種指標結果 ・預かり保育参加人数…18 人中 18 人参加 ・預かり保育担当者と担任による教育課程内の活動や家庭との連携の振り返り。 ・アンケート項目 「子どもの興味に応じた遊びを、ゆったりと安心して楽しく過ごしている」…100%
自己評価	分析（成果と課題） ・4 歳児 11 名、5 歳児 7 名のどちらも少人数学級であり、保護者の多くは、異年齢の子ども同士の関わりや同性の子ども同士の関わりなどを預かり保育に期待されているなか、18 名全員預かり保育を経験できた。 ・預かり保育担当者と担任で、個々の子どもの様子や家庭との連携など情報共有し取組に生かすことができた。 ・外部講師による預かり保育サッカー体験の日の預かり保育参加者が多かった。
	分析を踏まえた取組の改善 ・預かり保育時の子どもの遊びや子ども同士の関わりを豊かにするために、外部講師を招いた預かり保育サッカー体験の取組も続けていくようにする。
	（最終評価に向けた）取組の改善を検証する各種指標 ・預かり保育参加人数 ・預かり保育担当者と担任による教育課程内の活動や家庭との連携の振り返り ・アンケート項目「子どもの興味に応じた遊びを、ゆったりと安心して楽しく過ごしている」
学校関係者評価	学校関係者による意見・支援策 ・預かり保育 1 時間当たり 100 円で、保護者としては大助かりである。 ・異年齢の子どもたちと自然な形で出会い、関わり合って仲良くなっている。

最終評価

	（中間評価時に設定した）各種指標結果 ・預かり保育参加人数…18 人中 18 人全員参加 ・預かり保育担当者と担任による教育課程内の活動や家庭との連携の振り返り ・地域人材の活用…外部講師を招きサッカー教室開催 ・アンケート項目 「子どもの興味に応じた遊びを、ゆったりと安心して楽しく過ごしている」…100%
自己評価	分析（成果と課題）、重点目標の達成状況、次年度の課題 ・未就園児いちご組 3 歳児預かり保育を実施することは、保護者から多くの喜びの声があがり、後期には、未就園児いちご組の子ども全員が預かり保育を利用している。 ・アンケート結果の 100% から、子ども主体・子どもが中心の活動を保障する場を提供することができた。 ・小規模園の多様な子どもとの出会いや関わりが少ないという悩み解決の一助として、異年齢や同性の子ども同士の関わりを保障することができた。 ・外部講師を招いたサッカー教室開催時は、子どもたちにとって魅力的で、参加者数が増えた。
	分析を踏まえた取組の改善 ・今後も小規模園として、預かり保育での異年齢や同性の子ども同士の関わりを保障する。

	・サッカー教室など、外部講師を招いた教室を実施可能な範囲で取組を進めていく。
学校関係者評価	学校関係者による意見・支援策 ・少人数のため、異年齢の子ども達が関わり合っていることができる預かり保育の良さが生きている。 ・子ども一人一人にとって、安心してゆったりと安定して預かり保育が営まれていることがよい。

（４）子育ての支援に関して

具体的な取組 ・未就園児親子を対象とした教育相談の実施 ・幼稚園生活や保育内容説明会での先輩ママと触れ合い ・未就園児親子を対象とした、在園児や 地域の方と触れ合える取組（七夕のつどい、運動会、楽しいつどい、水遊びへの参加など） ・身長や体重を測り、親子で成長を喜び合う。
（取組結果を検証する）各種指標 ・子育て支援の取組の回数や参加人数、教育相談件数

中間評価

	各種指標結果 ・未就園児との交流…親子遠足（植物園）、避難訓練、運動会に参加 ・子育て支援の取組の回数…28 回（4 月～9 月）※R5 年度 30 回 ・ひよっ子クラブ参加人数…のべ 171 人、1 回あたり 6.1 人（4 月～9 月） ※R5 年度のべ 143 人、1 回あたり 4.8 人（4 月～9 月） ・教育相談（いちご組）件数…81 件（4 月～9 月）※R5 年度 84 件
自己評価	分析（成果と課題） ・4 月中旬からはほぼ毎月曜日と木曜日（10：00～11：30）は、子育てボランティアの協力により、未就園児 0 歳～5 歳のひよっ子クラブや 3 歳未就園児親子のいちご組（月曜日～金曜日の 9：00～11：30、9：00～13：40）を通して、子育て支援に関わる教育相談を継続して実施することができた。 ・月曜日～金曜日 9：30～15：00（12：00～13：00 を除く）の園庭開放は、降園時の短時間利用が少なくなかった。
	分析を踏まえた取組の改善 ・未就園児親子を対象とした子育て支援の取組については、ホームページや地域へのチラシ・ポスターの配布、区役所のチラシ配架など、広報活動を継続して取り組む。 ・公立幼稚園プロモーションビデオ配信や QR コードを掲載など、情報発信する。
	（最終評価に向けた）取組の改善を検証する各種指標 ・子育て支援の取組の回数や参加人数、教育相談件数 ・未就園児保護者に対するアンケート実施

学校関係者評価	学校関係者による意見・支援策 ・コロナ禍、子どもの出生率・出生数は激減している。 ・京都市上京区は地価が高く、子育て世代が住みにくい状況にある。
---------	--

最終評価

	(中間評価時に設定した) 各種指標結果 ・未就園児との交流…運動会、ポップコーンパーティ、焼き芋パーティ、もちつき、楽しい集い ・子育て支援の取組の回数…33回(10月～3月) ※R5年度 34回(10月～3月) ・ひよっ子クラブ参加人数…のべ215人、1回あたり7.4人(10月～2月) ※R5年度のべ216人、1回あたり6.4人(10月～2月) ・教育相談(いちご組)件数…103件(10月～3月) ※R5年度 100件(10月～3月)
自己評価	分析(成果と課題)、重点目標の達成状況、次年度の課題 ・ひよっ子クラブ参加人数が、前期1回あたり6.1人から、後期は、1回あたり7.4人と参加人数が増えた。 ・いちご組実施件数は、昨年度と同様今年度も184件 ・今年度より未就園児いちご組3歳児預かり保育を実施することになり、子育て支援の側面から、保護者の多くの喜びの声があがった。
	分析を踏まえた取組の改善 ・未就園児親子を対象とした子育て支援の取組については、これまで通りホームページや地域へのチラシ・ポスターの配布、区役所のチラシ配架など、広報活動を継続して取り組んでいく。 ・未就園児親子を対象とした子育て支援の取組への参加が年々減少傾向にある点については、公立幼稚園プロモーションビデオを活用したり、QRコードを上京はぐくみだよりなどに掲載したりして、情報発信する。
学校関係者評価	学校関係者による意見・支援策 ・ひよっ子クラブは、保護者同士の交流や待賢幼稚園の温かい雰囲気を感じてもらい、子育ての不安や負担を軽減する役割を果たしている。 ・家庭教育では、基本的な生活習慣の確立を目指し、子どもの主体性と社会性を育むのは幼稚園教育と両輪のように噛み合わせることが大切である。

(5) 地域とのかかわり(社会に開かれた教育課程)に関して

具体的な取組 ○学校運営協議会3企画委員会の取組の検証 A. 親子の学びプロジェクト ・もちつき、絵本室の整備・貸出、子育て支援センターとしての活動等を行う。 B. からだ元気プロジェクト ・親子遠足、運動会の競技、冬のマラソン等を行う。 C. 連携プロジェクト ・幼小交流、中学校チャレンジ体験受け入れ、グリーンストア等を行う。 ○地域資源を活かした指導計画作成
--

（取組結果を検証する）各種指標 ・ 交流の回数や地域の方々の声 ・ アンケート項目 「子どもは幼稚園の取組で地域や地域の方に親しみをもっている」
--

中間評価

	各種指標結果 ・ グリーNSTOA…地域の方々と花や野菜の苗をプレゼントする交流 ・ 7月5日七夕の集い…地域のお年寄りとの交流 ・ 二条城北小学校交流…幼保小連絡会、1年体育授業参観 ・ 二条中学校交流…チャレンジ体験 ・ 上京中学校…チャレンジ体験 ・ アンケート項目 「子どもは幼稚園の取組で地域や地域の方に親しみをもっている」…87.5%
自己評価	分析（成果と課題） ・ グリーNSTOAや七夕の集いの地域の人々や保護者の方々との交流を通じて、言葉のやり取りや一緒に物を作るなど、子どもの学びの場となった。 ・ 地域にある小中学校の児童や生徒と園児との交流を通して、園児にとって児童や生徒が憧れやモデルの存在になっている。 ・ 昨年度のアンケート結果 93.3%が、今年度 87.5%と、子どもは地域や地域の方に親しみをもっている割合が減少している。コロナ禍の時に比べ、明らかに地域行事が増え、地域の方々の触れ合いは増えているが、特に4歳児クラスの子どもの割合が低かったことから、まだ地域行事や地域の方々との出会いや交流が少なかったためと考えられる。
	分析を踏まえた取組の改善 ・ 地域行事への参加や協力体制のあり方には、地域とのつながりを大切にしながら、PTAとともに過重な負担にならないよう検討し、改善を図る。 ・ 「待賢カーニバル 2024」に参加し、地域の人々と出会い、交流する。
	（最終評価に向けた）取組の改善を検証する各種指標 ・ 交流の回数や地域の方々の声 ・ アンケート項目 「子どもは幼稚園の取組で地域や地域の方に親しみをもっている」
学校関係者評価	学校関係者による意見・支援策 ・ 待賢地蔵盆の開催は、50名近くの子どもたちが集まり、地蔵盆を経験し、保護者同士の関わり交流、地域の大人のボランティアに加え、中学生のボランティアとしての参画など、地域の伝統行事としていきたい。

最終評価

（中間評価時に設定した）各種指標結果 ・ 地域のお年寄りとの交流…3月3日ひなまつの集い ・ 二条城北小学校との交流…幼保小連携接続公開保育と研修会、生活科発表会と給食交流、学習発表会、アートフェスティバル鑑賞会 ・ 交流の回数や地域の方々の声 ・ アンケート項目 「子どもは幼稚園の取組で地域や地域の方に親しみをもっている」…83.3%

自己評価	分析（成果と課題）、重点目標の達成状況、次年度の課題 ・アンケート項目「子どもは幼稚園の取組で地域や地域の方に親しみをもっている」が、前期 87.5%から、今回 83.3%に減少している。地域や地域の方に接し関わりつながる機会が少なくなっていることが要因であると考えられる。
	分析を踏まえた取組の改善 ・コロナ禍以前の地域の方々との交流の機会を保育の充実という観点から、地域の人々と関わる取組を無理なく、適切に増やしたい。 ・地域の方々と直接関わる機会をもつことが難しい場合、ICT 機器を活用して取組を進めたい。
学校関係者評価	学校関係者による意見・支援策 ・今年度、町内の枠を超えた拡大版「待賢地蔵盆」を「地域の子どもは地域で育てる」と、待賢学区の多くのボランティアに支えられて実施することができたように、応援していきたい。 ・幼稚園が、地域コミュニティーを支えるプラットフォームの一つとしての役割を果たし続けてほしい。

（６）教職員の働き方改革について

重点目標 ・教職員一人一人が生き生きとした姿で子どもと向き合い、心身ともに健康で豊かな生活を送る時間を確保する。
具体的な取組 ・ノー残業デー（毎水曜日）と 18 時までの電話対応時間の徹底 ・業務共有ホワイトボードを活用し、校務支援員やボランティアと連携して業務を遂行する。 ・年休取得日数を前年度より増やす。
（取組結果を検証する）各種指標 ・教職員の時間外勤務時間「1 月あたり平均 3 0 時間以内」 ・年休取得日数「1 人あたり 1 0 日以上」

中間評価

各種指標結果	
・教職員の時間外勤務時間「1 月あたり平均 3 0 時間以内」…「1 月あたり平均 34 時間 46 分」 ・年休取得日数「1 人あたり 10 日以上」…「1 人あたり平均 6.5 日」	
自己評価	分析（成果と課題）
	・教職員の働き方改革に向けて、教職員の意識改革と具体的な取組に努めようとしたが、時間外勤務の縮減につながっていない。とりわけ管理職の時間外勤務時間は、業務と勤務時間のずれが生じており、縮減には至っていない。
	分析を踏まえた取組の改善
	・管理職の時間外勤務時間縮減に向けて、実効ある取組を行う。
	（最終評価に向けた）取組の改善を検証する各種指標
	・教職員の時間外勤務時間「1 月あたり平均 30 時間以内」 ・年休取得日数「1 人あたり 10 日以上」

学校関係者評価	学校関係者による意見・支援策 ・理事へリーフレットの配布・動画視聴を行った。 ・教員の負担が過重である状況にある。 ・若い教員が自分の思いを言えなかったり、孤立したり疲弊している。 ・管理職が率先して働き方改革を実行しないと、教職員に届かないので、地域行事に管理職は参加しなくていいと伝えている。
---------	--

最終評価

	(中間評価時に設定した) 各種指標結果 ・教職員の時間外勤務時間「1 月あたり平均 30 時間以内」 ・年休取得日数「1 人あたり 10 日以上」
自己評価	分析（成果と課題）、重点目標の達成状況、次年度の課題 ・教職員の時間外勤務時間目標「1 月あたり平均 30 時間以内」だが、結果は「1 月あたり平均 42.8 時間」と増え、時間外勤務時間縮減が達成できていない。 ・年休取得日数目標「1 人あたり 10 日以上」も、結果は「1 人あたり平均 9.8 日」と目標日数取得に至らなかった。 ・教職員の働き方改革に向けて、意識変革と具体的な取組を施してきたが、専任教頭不在で教頭が担任している状況を例に、人的環境、人員配置に課題がある。 分析を踏まえた取組の改善 ・取組の「量」ではなく、「何のための取組か」という「本質」に立ち返って、取組を見直し実施していく。 ・行事や取組について、復活や前倒し、スリム化など、教職員体制を考慮しながら、子ども達の豊かな学びと健やかな成長のために、柔軟に対応実施していく。
学校関係者評価	学校関係者による意見・支援策 ・幼稚園での教員の負担軽減や働き方改革、地域の抱える高齢化等による担い手不足など、それぞれの課題やその解決に向けた意見交換を行い、地域主催のたいけんカーニバルの在り方を見直す中で、PTA や教員の負担軽減について整理し、実施することができた。 ・子どもの豊かな学びと健やかな成長のため、地域ボランティアとして応援していきたい。